

# 国文研ニュース

No.62 WINTER 2023



## 袖珍銅版草双紙コレクション

### 目次

#### ●メッセージ

古典籍データ駆動研究センターが目指すもの……………渡部 泰明, 大山 敬三, 海野 圭介 1

#### ●エッセイ

五感で楽しむ文献資料調査へのお誘い……………村木 敬子 3

共同研究のすゝめ ——われ以外みなわが師——……………加藤 弓枝 5

第20回日本古典籍講習会を聴講して……………瀧山 嵐 7

#### ●書評

ブックレット〈書物をひらく〉26  
岡田一祐著『「いろは」の十九世紀 文字と教育の文化史』……………木戸 雄一 8

ブックレット〈書物をひらく〉27  
齋藤真麻理著『妖怪たちの秘密基地 つくもがみの時空』……………楊 暁捷 9

#### ●トピックス

創立50周年記念展示 こくぶんけん(推し)の一冊 展観記……………金子 馨 10

第15回日本古典文学学術賞受賞者発表……………11

ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント4件……………黄 昱 12

2022年度第1回こくぶんけんトーク 『無門関』の不思議な成功物語……………糸 汐里 12

令和4年度(2022年度)「古典の日」講演会……………中西 智子 13

2022年度アーカイブズ・カレッジ短期コース及びシンポジウム開催……………西村慎太郎 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況……………福原 真子, 齋藤真麻理 14

電子展示室「書物で見る 日本古典文学史」公開のお知らせ……………北村 啓子 15

## 古典籍データ駆動研究センターが目指すもの

国文学研究資料館館長 渡部泰明／古典籍データ駆動研究センター長 大山敬三／司会進行：同副センター長 海野圭介

**海野** この四月に国文学研究資料館に新しい部局として古典籍データ駆動研究センター（以下、センター）が設置されました。本日は館長・渡部泰明先生、センター長・大山敬三先生に、設立の背景やセンターへの期待、また、データ駆動型の研究とはどのようなものかといった点からセンターの方向性などについて伺いたく思います。

**渡部** 私たち日本文学研究者が普段の研究で利用するデータは主に書籍で、岩波書店の日本古典文学大系とか小学館の日本古典文学全集といった叢書の中に『古今集』や『源氏物語』といった作品が収められて広く普及しています。あるところでこうした作品の扱いについて指摘されてあつと思ったことがあります。書物を作る際には、まず本文を定めますが、これは一般に向けて読みやすく作られます。そうした話をしたところ、ギリシャ文学を研究している友人は、こんな大事な古典の出版を出版社が担い、しかも本文も簡単にしてしまうのかと驚いていました。ギリシャ悲劇なら、知られる限りの写本を集めてテキストを作り、それをあらためて一般向けに提示する、しかもそれを国家的にやると。あなたたちは随分変わっているねと言われたことがあります。私的な立場、あるいは研究者の個人的な営みとしてデータを作成し提供を行うことは以前からなされてきました。しかし、データを個人的な立場で集めて、それを公表してゆくのはどうしても限界があります。より公的なものへ、そしてより開かれたものにしてゆく必要があるでしょう。このセンターにはそうした部分を担う存在となることを期待しています。

**海野** 選択肢が複数ある中で、日本文学の場合は民間が一般を対象としてデータを作成し蓄積してきたのですけれども、より開かれたものとして行われるべきでもあり、センターにはそうしたデータ基盤を構築する役割が求められているということでした。大山先生いかがでしょうか。

**大山** 私は人文学というのをそう深くは知らないのですが、表

層的な話しかできないのですが、まずデータ駆動型研究というのがどういうものかということ、これは大量のデータをもってデータに語らしめるという研究だと思っています。しかし、そのあり方というのは学問分野によって大きく異なるはずですが、どこから持ってきたデータなのか、どこにあるデータなのか、どのように生み出されるのか、誰がどうやって集めるのかというようなことなど、それぞれ異なるでしょう。例えば、高エネルギー物理だと、大きな実験装置を回して観測機からデータが出てくる。天文学だと空に望遠鏡を向けて観測データを取る。実験で得たデータもあるし観測で得たデータもある。人文・社会科学の場合はデータの元は人間の営みだと思います。社会科学ですと人間の社会活動の中で生成されるデータが計算機に溜まっていて、それが元データとなります。けれども人文学の場合には自動的に溜まることはなくて、取りに行く必要のあるものなのだと思います。データ駆動といった場合の、データのあり方がまず違ってきます。それから、データ駆動型の研究というのは、時として仮説駆動型の研究と対比されて、データ駆動ならデータさえあればそこから結果が湧いて出てくるだろうといった捉え方をされがちですが、そんなことは決してありません。仮説駆動型というのは、こうであるに違いない、それを確かめたいという目的意識で資料を集めてそれをデータにし、検証するというアプローチを取ります。この二つの方法は相反するものではなくて、実はデータ駆動型の研究であっても仮説なしには成り立ちません。データに対してある仮説をぶつけることで検証していくことは同じで、その仮説が大きい小さいかというのが双方の違いになるのだと思います。データ駆動型の場合には、データがあって小さな仮説を繰り返し投げかけて検証していくということを通して大きな仮説、あるいは大きな知見を得るところが、従来の仮説駆動型、仮説検証型と異なる点だと思います。研究の方法が全く違うわ



渡部館長



海野副センター長



けではなく、あくまでもどういう仮説を立てるかというのが重要だと思います。

**海野** 日本文学の研究を例にすると、どのように説明することができるのでしょうか。

**大山** 仮説を立てたら、検証に必要な情報をどこかに取りに行く必要があります。例えば、遠方の図書館まで行って面倒な手続きをして書庫に入れてもらうとか、寺社等に日参してようやく見せてもらうとか、一つの仮説を抱えてその検証のために一生かかって資料を集めるということもあるのではないかと思います。データが予め揃ってれば、資料を集める部分は効率化されて、研究のサイクルも効率化されます。この部分がおそらく一番の違いであり、研究の本質的なところに集中するための手段がデータ駆動であると私は思っています。

**海野** データを揃えるという点においては、どのようなことに留意すべきなのでしょう。

**大山** データ駆動型研究の基盤となると、ある程度大量のデータを集めておかなければなりません。すると、仮説や目的にとらわれずに一般化した形でデータを集める必要があります。ある程度の標準化をして、特定の価値観を排して集められるものは全部集めておき、必要に応じてその中から各々の価値観にあうものを掘り出して使うこととなります。ここで、上手くすれば求めるものが見つかり研究は効率化されるけれども、上手くいかないと空振りに終わって結局役に立たないよねということになってしまう。つまり、仮説や目的に依存しない形でデータを集めるとしても、それらを全く考えないでデータを集めても結局何の役にも

立たないということになってしまうでしょう。あり得る仮説を俯瞰した上で、それに応え得るデータを集める必要があると思います。

**渡部** 古典というのは常に選ばれた人のものでした。エリートの専有物だったものが出版や叢書化を通して誰にでも触れられるようになり、享受層も広がり人々を網羅していきました。誰でもがデータにアクセスできるということを保証していくこと、それがこれからは本当に大切になってくることだろうと思います。

**海野** データ駆動型の研究についてお教えいただき、ありがとうございます。渡部先生のご意見通り、研究基盤としての、また社会インフラとしてのデータを扱うセンターの役割は重要です。重ねまして恐縮ですが、データ駆動型研究の推進基盤としてのセンターの進むべき方向についての考えをお聞かせ願います。

**大山** データ駆動型の研究を進めていくには、国文研の総力を挙げてでも規模の面では十分ではないと思います。センター自体も大きなものではありませんので、単独では華々しい成果を上げることは難しいでしょう。ですから、共同利用機関という国文研の立場を活かして国内外諸機関との連携の下で進めるのがよいと思います。ただ、何も材料がないところに人は集まりませんので、まずは魅力的な素材を作ること、それを使ったグッドプラクティスを出すこと、それを広く共有することで人に集まってもらうことが大切だと思っています。その点、ネットワーク事業で収集した30万点の画像というのは魅力的な素材ですが、画像の公開で止まらずに、それを皆で寄ってたかって使うための仕組みづくりが重要だと思います。技術開発を自分たちで行うというのもハードルが高いしょうから、月並みな言葉になってしまいましたが、いろいろな人たちと共同で研究を強力に推し進めていきたいと思っています。基盤となるデータの構築というのは、共同研究で一緒にしましようと言っても、なかなか難しい面もありますから、これは頑張ってるしかないのですが、それをどのように使うか、どのように面白く見せるか、いい研究成果を得るか、そういう経験値をできる限り共有していくための仕組み作りも大切です。それはシステムかもしれないし、検索技術かもしれないし、あるいは共同研究の新しい枠組を作ることかもしれませんが、いろいろな知見を共有する仕組みを作っていくのが重要な仕事のひとつだと思っています。



大山古典籍データ駆動研究センター長

## 五感で楽しむ文献資料調査へのお誘い

村木 敬子（国文学研究資料館学術資料委員会委員、大東急記念文庫学芸課長）

本誌「エッセイ」のコーナーでは、これまでも国文研の創立以来の重要な事業のひとつである「資料の調査収集」に関し、その有益性を述べた諸氏の文章が紹介されてきています。日本全国津々浦々、いや海外にまで古典籍の残した微かな痕跡を追いかめ、収蔵先を嗅ぎ出し、調査員を派遣しては書誌をはじめとするさまざまな情報を収集、その成果物である調査カードを蓄積し、その中から必要な書誌情報や画像をデータベースとして公開する。この調査員の働きは、傍目には花園を飛び回って黄金色の甘い蜜を集める働き蜂の楽しげな姿に似ているようにも見えませんが、実際は荒地を耕し、種を蒔き、大きな実りを待つ忍耐強い人の姿に近いといえるかもしれません。筆者もこれまでいくつかの調査に携わり貴重な経験を得させていただいたので、これから調査の場に赴かれる若い方々の何かの参考になればと、雑駁ではありますが少しく思ったことを述べてみます。

### 【悉皆調査について】

国文研による調査の最も大変かつ面白いところは、多くの場合「原則として悉皆調査」ということにあるでしょう。すなわち「国文学文献資料調査」という名称ではありつつも、所蔵先に仏書、漢籍、書画などが所蔵されていれば（文書などは除く場合もありますが）、紙媒体の全てを対象にして調査カードを採録するということになるのです。何に出くわすかは行ってみなければ分からず、自分に当たった資料の山については、これまで触れたこともないような古典籍でもなんとかカードを採録しなくてはなりません。これは結構なプレッシャーです。図書館や、筆者が勤務している文庫などのように、先達により一点一点の調査整理が済み、函架番号が付され、目録が整備されているところと異なり、個人コレクションや寺院の蔵書は目録などが整わないか、あるいはもとは千字文などで整理されていたとしても、その分類が見えにくかったり、すでに混ざりあってしまっていたりする状態が普通とも言えます。表紙が失われ、外題・内題などの手がかりもなく、名称のわからない本の名付け親にならなくてはならないこともしばしばです。自筆本かどうか、書き入れが本文と同一人によるものか、などという判断も面倒な課題です。とりわけ最も難しいのは時代判定で、料紙や筆跡などで判断せざるを得ない場合が多く、限られた時間で断定するのはまことに悩ましく、時に調査に参加されている先生方のご見解を伺ったりします。こういった「今更聞けない古典籍のギモン」をさりげなく聞いてしまえるのも、調査という場の持つ独特な雰囲気

気のお蔭です。今ではカードのデジタル化とそれに付随するデータにより解決しやすくなった項目もありますが、逆に読めない文字や印などをそのまま書き写すなどの作業がデジタルではできないため、重要な情報が欠落する可能性も否めないとはいえます。

とにかく様々なジャンルや時代、装訂の本に常日ごろから興味を持ち、折に触れ手にとって目を通す。そういった地道な経験の積み重ねの大切さが、調書を作るために重要となることを自戒の念を籠めて記しておきます。

### 【資料調査の手順】

筆者が参加した寺院調査の場合、まず蔵内のどこから手をつけるかを決め、一日でこなせそうな分量の本を一山ずつ調査場所に運び出し、一点ごとに仮番号を付した短冊形の薄い紙を挟み込み、必要事項を調査カードに記入する、という手順で行って行きました。端本だと思われていたものの片割れがでてくれば、それは一纏めにしていき、それにより生じた欠番はほかのもので埋めていきます。蔵から出し、カードを採録し終えたら蔵に戻す、といった単純作業の繰り返しですが、大抵の調査場所は蔵とは別棟ですから、いつも天候と睨めっことなります。

ところですぐに資料と対面できる調査場所ばかりとは限りません。あるお寺では、二階建ての広い土蔵の扉を開けさせていただいたところ、まず薄暗がりのなかにフワフワとした灰色の絨毯のようなものが見えました。暗闇に眼が慣れるにつれ、それが足首くらいまで堆積した埃の山だとわかった時の驚きは例えようがありません。早速、調査メンバーで対策を検討し、まずうっすら湿らした新聞紙を細かくちぎったものを床一面にばら撒き、それで粉塵を巻き上げないように絡めとりながら箒と塵取りで蔵外に出す、という方法をとることにしました。初秋の頃でしたか、北国の日暮れは早く、調査員の機転で車のヘッドライトで入口を照らしながら作業を続け、仕事を終えお寺を背にしたところには黄色に染まった銀杏の梢に煌々と月が輝いていました。翌日も大きなブルーシートを蔵の前に敷き、そこに運び出した書物の埃を払う、という作業に終日費やされ、書物と対面できたのは3日目からでした。

上記は極端な例でしたが、寺院や個人のお宅の本は埃や虫に耐えながらじっと時を過ごしてきたものが多いように思います。床に敷かれた座布団に座り、板状になった本の埃を払い、かじかむ指でなんとかめくれるようにそっと剥がしていた時に

聞こえてきた鶯の声、お茶から立ち上る白い湯気、脚の痺れなど、書物調査は五感で味わうものと言えるかもしれません。

### 【書物を守り伝える人びと】

日頃から古典籍に親しんでいる人には、その価値は言わずもがなのことではありますが、あまり興味のない人にとって本はただの場所塞ぎで厄介な代物でしかありません。蔵書家の奥様の「本の無い家に住みたい」とのつぶやきを耳にすることもしばしばあります。しかし代々蔵書のある旧家に生まれ育った人にとって事態は簡単ではありません。先祖が守り続けてきたものをどうするか、自分の代で手放してしまってよいものかと懊悩する方々も少なからずお見受けします。蔵書が心配で長期間の旅行などで家を留守にすることができない、という悩みを抱えている方もいます。またお寺のご住職やご家族も日常的に多忙なため、お蔵の管理にまで手が回らないのが普通です。寺院や個人が本を虫害や災害、盗難などから守り続けるということは並大抵なことではない、ということも、調査させていただく側として心得ておく必要があると思います。

### 【誰のための調査か】

調査を円滑に進める為には、所蔵者と調査側との信頼関係を築くことが尤も肝要であるということは、すでに本誌で諸先生が述べておられる通りです。そもそも所蔵先にとっては調査が必ずしも歓迎すべきものとは限りません。仮に調査を終えて仮目録ができ、それを公開したとしても、所有者の方々には閲覧希望者を受け入れる体制が無いことが多く、却ってご迷惑をおかけするのでは、という懸念が常に付きまといまいます。突然、本が見たいと玄関にやってきた人に、所有者がお帰りいただく場面に遭遇したこともあります。筆者は国文研の先生方が所蔵者側に折に触れ調査の経過をお伝えしたり、成果を仮目録や画像にしてお渡ししたりするという気遣いにより、双方にとってこの調査が益するものであるという信頼を得る様子を眼にしてきました。逆に調査で所蔵者にご迷惑をおかけすると、その場の問題だけではなく、その後にきちんと手続きを踏んで調査に伺おうと思う後進の人々に、門戸が閉ざされてしまう可能性もあります。

### 【文献調査の楽しみ】

調査を続けるにつれ、例えば寺院などで同じ筆跡で書か

れた書物に立て続けに出くわすことがあります。書写者と馴染になると、寺の歴史におのずと興味が沸き、流れ込んできた古典籍の堆積がどのような構造になっているのか、何故その資料がそこにあるのか、などが次第に明らかにされるのも調査の醍醐味の一つです。そして寺院と寺院、人と人のネットワークが見えてくれば、その発見が何らかの形でその後の研究に繋がる可能性は高いと思います。

具体的な例で言うと、筆者が長年調査に関わった京都深草瑞光寺には、開基元政上人と歴代住持の自筆本、手沢本が豊富に存在します。長年調査に通ううちに、元政自筆本や手沢本の特徴が分かってきます。例えば元政は端正な文字を書く人ではありますが、「雑抄」のようなものにはそうでもないものもあり、それらは二代目住持の慧明日燈の手とも似ています。ただ元政が傍点に用いた朱の色や打ち方は独特で、慧明の手沢本とは見分けがつかず、蔵書印の捺し方にも特徴がみられ、多くの場合巻頭に「元政」の白文朱方印、巻末に「草山瑞光蘭若」の長方朱印の組み合わせがあります。それらを備えていれば、とりあえず元政の自筆本、あるいは旧蔵書と見なすことができそうです。

瑞光寺には『草山集』の自筆稿本の一部を軸装にしたものや、恐らくは元政の弟子たちの寄り合い書きによる稿本があり、それらを突き合わせると、版本『草山集』に至るまでの推敲のあとを辿ることができ、今後の研究に資するもの大と思われます。また元政没後にその遺徳を慕って集まった文人たちの筆跡も残されており、瑞光寺をめぐるネットワークが見えてくるのも面白いところです。もちろん、美しい料紙にしたためられた元政のうろわしい水茎の跡の魅力は圧倒的で、調査の手を休めて見入ることしばしばでした。目下、こうした所蔵資料の中から精選したものを翻刻し資料集として刊行すべく準備を進めていますが、そのようなことが可能となったのも冒頭に述べた「悉皆調査」という国文研の調査方針の大きな機能に違いありません。

調査先でこれまで全く知られていなかった本や、逸書と考えられていた幻の本と出合うことができれば、調査員冥利に尽きるといえますが、それらは川原で砂金を探す、という程ではないにせよ、額に汗し、時に蚊と戦い、土蔵の低い梁に頭をぶつけなどしながら続けてきた調査の、いわばご褒美と言えるかもしれません。そして調査後にもれなくいただけるご褒美といえば、真夏の夕暮れ一杯のビールの美味しさだということは、多くの先達も経験してきたことではないでしょうか。

# 共同研究のすゝめ ——われ以外みなわが師——

加藤 弓枝 (国文学研究資料館共同研究委員会委員、名古屋市立大学大学院准教授)

## 一、はじめに——我以外皆我師

戦後に単行本として刊行された吉川英治 (1892-1962) の小説『三国志』が、絶大な人気を博したことは言うまでもありません。横山光輝 (1934-2004) による漫画化の影響もあり、小中学生のころには我が家にも吉川ブームが到来しました。食卓横にあった本棚の一角は吉川作品が占拠し、その背表紙を眺めながら食事をしていたことから、自然と作品を手にとるようになりました。吉川小説の熱心な読者であった兄は、『三国志』のほか、『宮本武蔵』や『新・平家物語』などの面白さを力説してくれましたが、私のもっとも惹かれたのは、『われ以外みなわが師 わが人生観』(大和書房、1972) というエッセイでした。

書名となった「われ以外みなわが師」は吉川による造語と言われており、『論語』(述而第七)の「三人行へば必ず我が師あり。其の善なる者を以て之に従ひ、其の不善なる者は之を改む。」に通じる言葉です。『論語』は「我と他の二人と三人で一緒に事を行えば、必ずそこに我が師として善を勧め不善を戒めるものがある。すなわち、他の二人の者の一人の行うことが善であり、一人の行うことが悪ならば、我はその善なるものを採り取ってこれに従い、その悪なる者は我が身に反省してこれを改めれば、この二人の者はみな我が師である。師について教える時にばかり師があるのではない」と解釈されています(宇野哲人『論語新釈』、講談社学術文庫、1980)、吉川という言葉はこの内容をより端的に表現したもののように感じます。

これまで研究者の端くれとして、共同研究へお声がけいただいたり、自ら応募したりする機会がありましたが、折に触れてこの言葉を反芻しています。若手と呼ばれる時期は過ぎ、ここ数年で中堅であることを実感するようになりました。諸先輩からはまだまだ早いとお叱りを受けそうですが、残された研究人生で成し遂げられることについて思いを馳せるようにもなりました。そのような折、このようにこれまで辿ってきた道を回顧する機会を得ましたので、行き詰まりを感じて途方に暮れている大学院生など若き研究者の目に留まり、少しでも励ましとなることを願いつつ、私自身がまだ若かった頃に参加した、二つの共同研究にまつわる思い出を書き留めたいと思います。

## 二、古典籍に導かれる

最初に関わった共同研究は、新しい蔵書目録作成のため開始された西尾市岩瀬文庫の悉皆調査でした。一般的に共

同研究とは、民間から研究者ならびに研究費を受け入れて、大学の研究者と企業の研究者とが共通の研究課題について対等の立場で研究を行うことを指します。しかし、日本文学の場合は、論文は一人で執筆することが多いため、近年は産学連携研究も増えてはきましたが、共同研究と言え、今も昔も資料調査や注釈研究などが主流のように見受けられます。

この共同研究は、博士後期課程に進んだ翌年から、研究とは何たるものかを教えてくださった指導教員の塩村耕先生のもと開始されました。大学院生でしたので、共同研究者ではなく資料調査員という協力者としての参加でしたが、林望『書誌学の回廊』(日本経済新聞出版、1995)を読み、書誌学という学問に魅せられていた私は、「いよいよ古典籍という大海に出航するのだ」と期待に胸を膨らませ、調査に参加しました。ところが、たちまち挫折することになります。

新しい目録は、簡略な書誌を記すものではなく、その書物に何が書いてあるのか分かるように、踏み込んだ記述をはかるものでした。書物が作られた理由や内容、収蔵されるまでの経緯などを、誰にでも分かるように摘記する必要があります。それゆえ、すべての丁に目を通し、先行研究も調べることになります。また、書誌をとる古典籍は、函架番号順に書庫から調査室へ運ばれるため、自らの専門領域の本を選ぶことはまずできません。

もちろん、時間をかければ、まとめられなくはありませんが、それでは人生が終わってしまいます。限られた時間でいかに効率よく調査を進めるべきか、そのコツは経験を重ねて体得するほかありませんでした。共同研究者の先生方は、手際よく書誌をまとめておられ、自らの力不足を痛感することになりました。少しは上達したかと思っても、その完璧な書誌カードを目にするたび落ち込みました。しかし、調査によって、大量の資料を扱うことへの恐怖心がなくなったのみならず、取り扱った古典籍を通して、かけがえのないことを学ぶことができました。

古い典籍の世界は広くて深いこと、それらを伝えようとしてきた古人がいたこと、現在も大切に思う人々がいること、とは言え、未来に伝えていくことは容易なことではないこと——この共同研究によって、私は研究ならびに人生における大切な実を得られたと思っています。その後も古典籍は行く道を照らしてくれる師のような存在です。

現在、同志社大学の山田和人先生を中心に行っている、

「古典教材の未来を切り拓く！研究会」（通称「コテキリの会」）などの新しい古典教材開発に関する共同研究も、個人的な思いの根っこのこの経験に繋がっているように思います。

### 三、人に導かれる

もう一つの共同研究も、やはり資料調査から派生したものです。私の研究の出発点は、近世中後期に上方で活躍した歌人小沢蘆庵（1723-1801）にあります。それゆえ、大学院生の時から、国文学研究資料館によって行われていた蘆庵文庫の調査にお声がけいただきました。その資料は今では京都女子大学にあります。当時は隣接する新日吉神宮に所蔵されており、参加し始めた頃は、上野洋三先生、藤田真一先生、鈴木淳先生らが中心となって調査を進めておられました。調査の際に聞こえてくる話は雑談も含め、井底の蛙であった私にとって刺激的であり、地元の研究会以外で他大学の研究者や大学院生と知り合う大切な機会となりました。

初めて専任職についた頃からは、国文学研究資料館の正式な調査員となり、飯倉洋一先生、大谷俊太先生、神作研一先生、盛田帝子先生、山本和明先生と一緒に、年に2回程度、調査を行っていました。それゆえ、新日吉神宮創祀850年を記念して、2009年に日本書誌学大系の一書として『蘆庵文庫目録と資料』を青裳堂書店から刊行することになった際、編者である蘆庵文庫研究会の一人に加えていただくことになりました。そして、この研究書の刊行が、基盤研究(B)代表飯倉洋一「近世上方文壇における人的交流の研究」(2010～2013年度)という共同研究へ発展し、『小沢蘆庵自筆 六帖詠藻 本文と研究』(和泉書院、2017)の出版へと繋がっていくのです。

蘆庵文庫研究会との出会いがなければ、おそらく私は今日まで研究を続けてこれなかったと思います。共同研究が始まる前は、さまざまなことに行き詰まっていた。同僚に恵まれ、家族の支援もありましたが、公務が苛烈を極めたことから、論文執筆が思うように進まず、研究へのモチベーションは下がる一方でした。しかし、共同研究に参加することで、目指していた道を見失わずに済んだのだと思います。温かい言葉もかけていただきましたが、何より必要とされる場所があったことが、当時の私にとっては大きな支えとなりました。

私は人に恵まれた人生を歩んできた自覚がありますが、

決して順風満帆であったわけではありません。研究が続けられないと思ったことも、一度や二度ではありません。それゆえ、行き詰まりを感じ、研究を継続すべきか否か悩んでいる若き研究者には、新たな研究上の出会いを求めることも現状を打開するための一つの方法であると伝えたいのです。

学会や研究会への参加は自らのホームグラウンドを形成することになりますが、限られた期間内で成果を公開することが求められる共同研究は、参加者が各々の専門知識を持ち寄ることで、時には思いも寄らぬ場所へと到達できることがあります。新しい景色を一緒に見ることができる仲間がいることは、自らの研究の活力にも繋がります。

もちろん研究は孤独なものであり、優先順位を間違えろとかえって自らの首を絞めることにも繋がりがかねません。しかし、新たな一歩を踏み出すことは決して悪手ではないでしょう。国文学研究資料館には、同館が所蔵する特定コレクションのもとに、個別研究を行う研究分担者を募る共同研究があります。参加者が新たな知見を獲得するとともに、関係文献の解題作成と公開を研究成果の一つとしていくことから、新たな出会いを得られるのみならず、文献を見る能力も磨かれます。博士後期課程の大学院生も応募できますので、ぜひこのような公募制の共同研究などへも挑戦してもらえたらと思います。

### 四、おわりに——若手に導かれる

このように、人であれ書物であれ、私は出会ったすべてのものから教えを受けてきました。そして、最近とくに感じるのは、若い研究者からの学びです。私はいま、4つの共同研究に携わっていますが、自らが主導しているものは、一回り以上年下の研究者たちと進めています。烏滸がましいことですが、計画を立てていた頃は、これまで年長の研究者や経験から得た知見を、今後の学界を担う若い方々へ伝えたいという思いがありました。

しかし、実際に研究を始めてみると、若手研究者に導かれている有り様です。自らの不甲斐なさに情けなくも思いますが、まっすぐに研究に取り組む姿勢や、面白いと思った方向へ猛進する様子は、落ち着きつつあった研究への情熱を呼び覚ましてくれます。壁にぶつかりながらも、前へ前へと進んでいく若き力に導かれつつ、今後もまだ見ぬ地を目指して、ともに航海を続けていきたいと思っています。

## 第20回日本古典籍講習会を聴講して

瀧山 嵐 (総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻博士後期課程)

令和4年7月12日～15日に開催された「第20回日本古典籍講習会(2022年度)」に参加し、全17講義を受講しました。本講習会は、若手研究者や日本古典籍の所蔵機関の職員で古典籍を扱う業務担当者を対象として、国文学研究資料館と国立国会図書館との共同で開催されています。本年度も昨年度と同様、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の影響を受けて、オンラインでのリアルタイム配信の形式で開催されました。

講義前半では、日本古典籍の基礎知識、くずし字、写本の奥書・識語、版本の刊記・奥付、蔵書印、装訂・料紙、表紙の文様、江戸・明治期の出版文化について学びました。続いて、貴重な古典籍の保存に関する基本的な考え方と実践方法について学びました。そして講義後半では、国文研職員による「日本古典籍総合目録データベース」「新日本古典籍総合データベース」の仕組みや取り扱いのポイントを伺いました。他方、国会図書館職員による日本古典籍資料の保存、材料、書誌データ作成、電子化に関する解説を通して、日常的に日本古典籍を扱う実務担当者の業務内容を伺いました。

最初の講義は、神作研一先生の「はじめての古典籍(付)書誌用語概説」です。主に「古典籍」「書誌学」の定義、写本と刊本の原則、理想的な目録作成と書誌解題の記述方法に関する基礎事項について解説していただきました。書誌学とは「書物を対象とした科学的、文化史的な研究」と規定され、具体的に「くらべる学問である」「術語によって記述する」「何が何であるか」の3つのポイントを掲げられました。「くらべる学問である」のご説明では、安野光雅氏著『くらべてかんがえる』(福音館書店、1972年)という絵本に所載の2枚の同一絵柄の図版を提示され、それぞれの相違点はどこにあるのかと、参加者に問いかけました。このエッセイの読者には正直に告白しますが、恥ずかしながら私は最後まで相違点を見つけることができませんでした。神作先生は「大人は細かい違いばかりを気にする。先入観をなくして比べてみるのが大事。けれども、それが難しい」という印象的な言葉で、書物を虚心坦懐に眺めることの大切さと難しさを示してくださいました。また、書誌学は学術用語の蓄積で成り立っているという特質をご指摘のうえで、研究者や実務担当者の考え方や立場によって認識に差異があることから、用語の定義と指し示す意味の範疇について一定の共通理解を創り出すことが重要であると述べられました。

さて、本講習会で教えていただいたことを振り返ってみると、古典籍を扱う研究では、対象への絶え間ない観察と、その特質を見抜くための深い洞察とが基軸となり、正確な知識に裏付けされた術語を丁寧に積み重ねて、的確に言語化していくことが重要であると痛感しました。原本資料を活用した研究は、時に「常識」だと思いついてきた従来説に変革を迫り、転換をもたらす危険な側面を持つ研究領域でもあります。だからこそ、曖昧な観察と洞察とで出来上がった他人の「楼閣」に無批判に寄りかかるのではなく、一度、丁寧に研究対象となる作品の基となる礎を自分の目で確かめることが大切であると思います。

ところで、私が書誌学という学問と出会ったのは、修士課程に在籍している時でした。当時の私は、書誌学という学問に対して、経験値が無ければ立ち入ってはならない印象をいだいており、「高尚な研究者」のみに許された「閉じられた」特権的な研究領域であるという先入観がありました。しかし、現在では各種データベースの発展により、いつでも、どこでも、誰でも、容易に、古典籍の情報にアクセスすることが可能となり、手続きを経れば原本資料の調査を行うことができます。私が「閉じられた」と思っていた学問は、未知の世界に飛び込む勇気と最低限必要となる基礎知識さえあれば、「開かれた」領域であるということに気付かされました。今では日常的に日本古典籍に関する研究に取り組んでいることもあり、資料について調べたら調べた分だけ、疑問と発見とが溢れ出てくる魅惑の学問領域のように思います。

本講習会では、日本古典籍に関する基礎知識や取り扱いの実践方法を総合的かつ体系的に学ぶことができます。かつて書誌学・文献学の世界から手招きをして、私を「沼」に引きずり込んでくださった先生は、「専門分野の書物だけを見ていただけではダメで、写本も版本も好き嫌いをせずに、書物全般を広く深く見続けることが大切」と仰っていました。本講習会を終えて、その言葉の意味と重みとが少し分かるようになった気がします。本講習会は、日本古典籍を活用した研究や業務をおこなう初学者や実務担当者を迷子にさせず、入門するための「入口」まで道案内する、重要な役割を担っているように思います。

この度、参加者の日本古典籍への関心や知見を深められるように様々にご尽力くださり、大変充実した講習会を開催してくださった国文学研究資料館、及び国立国会図書館の皆様には厚く御礼申し上げます。

ブックレット〈書物をひらく〉26

## 岡田一祐著『「いろは」の十九世紀 文字と教育の文化史』

木戸 雄一（大妻女子大学文学部日本文学科教授）

本書は、「いろは」に着目しながら十九世紀の文字と教育の変革について見ようとしている。ここではまとめの第五章を除いた第四章までを要約しつつ評を加えたい。

第一章は、本書で扱う「いろは」についての基本的な事柄の確認。江戸時代の「いろは手本」に用いられる固定された平仮名を「いろは仮名」と呼んで他の仮名と区別し、今の平仮名との関係性を起点に、十九世紀の文字と表記について述べるという本書の構想を示している。

第二章は、寺子屋における文字学習について。歌川広重『春興手習出精双六』を用いて寺子屋の手習いの階梯を説明するというアイデアは面白い。振り出しが「寺子入りいろは」ではじまり、名寄せ型往来物から『庭訓往来』などの実用型往来へと進むすぐろくからは、「書くこと」が先導し、「読むこと」がそれに従う当時の読み書き教育の基本的な性格が浮かび上がる。

往来物に使われた漢字も意味や用法ではなく形から習得される。ただし、往来物に使用される御家流の行草体は楷書のように明確な形を持っていない。行と草の間の流動的な書体であり形状の「個別性」が高いために、「七ついろは」は「いろは」を起点として行草書を体系化しようとしている。ここで述べられている行草体の「個別性」とは個人の手跡に差異が出やすいということであろうか、それとも行草体という様式自体に定まった形がないということだろうか。いま少し厳密な説明がほしい。

このような文字習得を前提として、往来物は日本語の語順を漢文様にした変体漢文によって書かれ、内容は漢字で書ける内容に整理された。文字が内容を規定するのである。続いて学問や芸道へと本書の記述は進むが、評者には「書くこと」主導の読み書きから、内容を問題にする学問世界へと踏み込むには大きな跳躍を要するのではないかと思える。例えば素読は意味をひとまず度外視するところから始まるが、これは表層的に「書くこと」を優先するという教育法と通底していそうである。『福翁自伝』で揶揄されている「読む許りで其意味は受取の悪い書生」は、「書く」という行為の表層性からも抜け出す契機を見つけられないのではあるまいか。「いろは」から入る教育が生き残らなかった経緯は第四章で詳しく述べられるが、ここで先に触れておく部分があってもよかった。

第三章は西洋人の日本語学習について。だが、著者がことわっているように欧米人の日本語学習には分からないことが多い。その中で「いろは」を基本的な文字として紹介し書体の美しさにもこだわったロニー、対して学問的な文章語で漢訳聖書を翻訳し無個性な明朝体活字を『和英語林集成』でいち早く採用したヘボン、また日用必須の文字を示して漢字節減の基礎を作ったチェンバレンが取りあげら

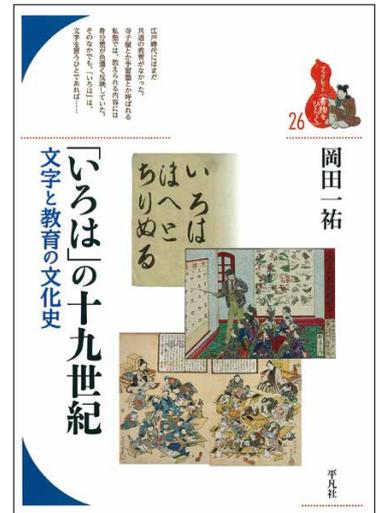
れる。第四章で取り扱う「書くこと」と「読むこと」の転回を西洋人の日本語学習が予告しているということであろうが、日本語学習というよりは日本語文字に対する西洋人の取り組みを紹介している。学習に比重を置けばここにサトウが入っただろう。

第四章は、小学校という新たな教育制度の

下での文字学習の変容について。本書の中では話題が最も多岐にわたっている。まず、教育が寺子屋式の「いろは」を起点とした文字優先の学習法と大差がないものから、明治中期に既知の事物の読みを片仮名で示した後に平仮名に対応させる学習法へと転換する。これは「読むこと」を起点として「書くこと」へ移行する学習法だが、それにとまって、「書くこと」を基盤とした「いろは仮名」は「読むこと」を基盤とした「五十音図」に置き換わる。仮名も「五十音図」に対応する「いろは仮名」のみで文字を綴ることが優先され、変体仮名は後回しにされた。日露戦後には変体仮名の廃止が提言され、現在の平仮名が「いろは仮名」に代わって示されることで、「いろは」と変体仮名は歴史上の存在となった。

漢字学習では「易から難へ」という習得の方向にしたがい、仮名で言葉を習得してから漢字を示すという方法に変わった。これも「読むこと」の優先である。漢字の数も制限され、習字教育は書体の豊かさを切り捨てる。内容を習得する学問は「書くこと」の多様性を削ぎ落としていく。翻訳は意味を伝達することに長けた文言を文体とし、また口語体も教科書に採用されるようになった。木版印刷から活版印刷への移行によって文字は画一化され内容伝達に徹したツールになった。

本書は、実のところ十九世紀の「書くこと」と「読むこと」の関係のダイナミックな転回を扱おうとしている。「いろは」というタイトルが終始窮屈そうだったのは、本書がワンテーマでは収まらないスケールの問題を扱っていたからである。二章と四章を仮名に話題をしぼりつつ、例えば仮名活字の書体の展開と筆書きの書体との対応関係など、仮名と技術と文化の相互関係の方に話をふくらませてみて面白いかもしれない。



ブックレット〈書物をひらく〉27

## 齋藤真麻理著 『妖怪たちの秘密基地 つくもがみの時空』

楊 暁捷 (カナダ・カルガリー大学教授)

『付喪神絵巻』は、研究者にとっても、普通の読者にとっても、ユニークな立ち位置を占めている。捨てられる道具が人間に復讐するという、奇想天外で分かりやすい物語は、いかにも中世的な設定であり、鬼や妖怪のことが注目を集める中で、大切な原点の一つとして繰り返し取り上げられる。一方では、ほとんどの言及は道具が山積みに放り出される絵巻最初の画面に止まり、その後には続く長い物語を伝える多岐にわたる詞書も、素朴に見えても意味合い深い画像も、正面から掘り下げて読み解く試みはあまりにも少ない。そのため、この作はいつまで経っても、鬼や妖怪を語る傍証に過ぎず、ベールに包まれ、難解で近づきにくいものであり続けた。このような状況は、ここにきてようやく大きな変化を迎えた。

ブックレットというシリーズの様式に従い、本書はわずか100頁という小さい体裁を取る。しかしながら、ここに展開された『付喪神絵巻』への視線や、それを読み解く姿勢は、とてつもなく鋭くて真剣なものだ。全体は、「都市空間」、「和漢の学芸」、「ことば」という三つのキーワードをめぐる三部構成である。いわば横に広がる空間、縦に続く時間、言葉を通して見出す中世人の抽象的な思考という、周到に構えたアプローチである。ページを開いて読み進めると、都市空間は記憶をもって縦に展開し、詩や歌の継承や享受は中国と日本と横に広がり、さらにそれら一つひとつは言葉の成り立ち、意味と応用によって支えられている。精緻に構築された絵巻読解の道筋は、読者を惹きつけて離さず、絵巻に隠された数々の謎を解き明かす強力な手がかりとなった。

「空間」をテーマとする第一部は、二つの系統をなす絵巻の底本とこれをめぐるこれまでの研究史の概要を簡潔に述べた上で、詞書で語った地名に注目し、それらを実際に地図に落として空間位置を確認し、さらに物語や日記に残された記述を拾い上げて記憶の実態を掘り起こす。その結果、北は船岡山、南は東寺と都を縦断する「妖怪ライン」を明晰に浮彫にした。続いて「学芸」を取り上げる第二部は、詩作を競い教養を披露する妖怪たちの行動に注目する。唐銭起、明皇、鞆鼓、蝶幸、どれもが和漢にわたる学殖に支えられるものであり、妖怪たちは自身が人間と違うことを見せつけるためにこれを盛んに語り見せびらかした。ここに、絵巻の絵画表現をめぐる著者の解析はとりわけ傾聴したい。素朴な構図を重厚な伝統をもつ歌仙絵に重ね、中国の故事を画題とする伝存の、そして伝説の絵を集合させて、見逃しがちな室町の文化や教養のあり方を提示してくれた。「ことば」を扱う第三部は、絵巻の主人公である妖怪の呼び名やその成立に絞る。「つくも」と「ばけもの」、漢字表記の「付喪」、「術物」、「天化」、「妖化物」、こ

れらの言葉の成立の裏に隠された多彩な語彙が流転し、さまざまな時空や文脈において集合し合唱する様子は、中世人の発想の深層を覗かせてくれる。

著者が本書において一貫して見つけ、追いつめるのは、中世室町の異類もののルールであり、遊びの精神であった。「(この絵巻に)凝らされた趣向こそ、

室町物語の文学圏域が共有していた学芸であり、古典知の連鎖のすがたであった。」(92頁)。そのため著者は、在来の概念に捉われず、つねに広い範囲にわたるオリジナル資料に立ち戻り、何気ないように知の玉手箱を開いては新鮮で説得力ある資料を取り出して読者に考えさせる。中でも、絵画資料の読み方、いわば絵をもって絵を語り、ビジュアル文献の伝承と享受の様相、その価値の見出し方において、特筆すべき実践と成果を示している。

『付喪神絵巻』をめぐるこの小さな一冊は、そのページ数を大きく上回る労作であり、研究史において大きな指標を残すものだろう。絵巻のみならず、中世の社会や文化、知識と教養、理想と憧憬に関心ある人には、ご一読をお勧めしたい。



2022年10月13日、楊暁捷先生は63歳で世を去られた。

先生が日本文学研究の発展と国際化に果たされたご功績は誠に大きく、2016年春に旭日小綬章を受けられたのはそのごく一端を示すものである。当館の研究事業にも格別のお力添えを賜り、近年は英文誌 SJLC のアドバイザーボードとしてご指導を仰いでいた。

書評の玉稿を賜ったのは締切より2ヶ月近く早い9月下旬のこと、悲報はあまりにも突然であった。

振り返れば、先生と初めてお会いしてから四半世紀が経つ。

常に凜として研究に向き合われた楊暁捷先生のお姿と温かなお人柄を心に刻みつつ、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(齋藤 真麻理)

## 創立50周年記念展示 こくぶんけん〈推し〉の一冊 展観記

国文学研究資料館（以後「国文研」）は、平成20年（2008）に現在の立川市緑町へ移転しましたが、昭和47年（1972）に品川区戸越に創設されてから今年で半世紀を迎えます。これを記念して同館の展示室では創立50周年記念展示「こくぶんけん〈推し〉の一冊」が企画・開催されました（令和4年5月13日～8月31日）が、展覧会のタイトルが斬新で衝撃的でした。展覧会を企画する際、チラシを手にとってももらったり、ポスターの前で立ち止まってもらったりするためにどのような名称にするか、どのようなデザインにするかいつも頭を抱えます。そのような中で、本展の広報物はシンプルなデザインながら、タイトルにはインパクトがあり、思わず「なんだこれ!？」とチラシを手にとっていました。

本企画は、愛知県西尾市岩瀬文庫の創立100周年記念特別展「岩瀬文庫の100点」（2008年）に触発された展示であることを伺いましたが、岩瀬文庫の展示では研究者、学芸員・司書、市民がそれぞれに作品を選んだようです。国文研では同館に所属する国文学・アーカイブズ学の研究者がおおよそ2万点の古典籍、およびおよそ52万点の歴史史料の中から1点を厳選しています。第一線で活躍する研究者がどのようなものを選ぶのか、とても興味深く、展観する前から心躍らせました。

展示室は新型コロナウイルス感染症対策のため、月・水・金曜のみの事前予約制（11～16時）で開室されています。猛暑日に展示室を訪れましたが、作品保護のために温湿度や照度が管理された展示室は涼しく快適で、密になることなくゆったりと展示品に直面することができ、国文研の先生方がどのような想いでこの作品や史料を選んだのだろうか、自分だったらどんなものを選ぶだろうかと思いを巡らせながら展観しました。

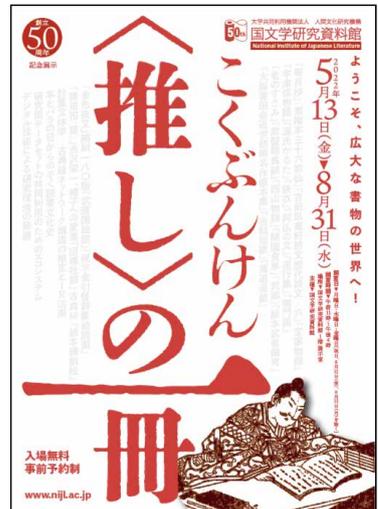
本展は、第一章「〈推し〉の一冊」、第二章「国文研をひらく」、第三章「国文研のこれまでとこれから」という三章立てで構成されていますが、いうまでもなく第一章が本展示企画の最大の見どころと言えるでしょう。ここでの展示は、国文研の研究者がこれぞという一品を厳選して展示しているわけですが、文学作品はもちろん、渋沢栄一のシルクハットや山高帽、展示ケースに収まらず残念ながら実物の展観は叶わなかった「武蔵野国絵図」（縦5m×横5m）などバリエーションに富んだ史料が並びます。展示品を一覧しても多種多様なジャンルにおよんでおり、国文研に所蔵されるものの層が厚いことを物語っていますし、情報系研究者の展示により国文研が取り組んでいる研究の一端もうかがえます。中でも興味深かったのは、各研究者の研究テーマと真ん中のものばかりではないことです。研究テーマに合致しているものでもこれを〈推す〉のか、と意外な推しの一冊もあり驚かされました。

残念ながら、コロナ禍のためギャラリートークはありませんでしたが、YouTubeを活用して各研究者が選定した展示品の魅力を語っています。展示を見逃した方は、図録（同館HP<<https://www.nijl.ac.jp/event/exhibition/2022/05/post-42.html>>からダウンロードできます）を見ながら、1分では収まりきれない熱い想いを視聴してみてください。

さて、第二章の「国文研をひらく」では、「自然を味わう」「あの人が書いた文字」「挿絵を楽しむ」「書物で国際交流」「古典で遊ぶ」「古典と旅をする」「今年記念を迎える本」というテーマに分けて、普段の展示にあまり出品されない作品や史料の中から厳選して展示しています。一つの展覧会が成り立ちそうな細かなテーマ設定で、あれこれ出品したくなる気持ちを抑えて一章にまとめた担当者の苦労が伝わってくるようです。とりわけ、「挿絵を楽しむ」や「書物で国際交流」では、書物同士が連綿と歴史を紡いでいく様子がうかがえ、古典籍の奥深さや面白さが伝わってきました。

そして、第三章の「国文研のこれまでとこれから」というコーナーでは、定礎に収められていた資料の初公開に加え、これまで紡がれてきた国文研の歴史が紹介されています。展示されたパネルには各時代の国文研の様子が映し出されており、戸越にあった頃の同館の様子が懐かしく、学生の頃によく閲覧や展観に通ったことを思い出します。会場にいた方も、それぞれに自分と関わりのあった頃の姿を懐かしんでいるようでしたし、先生方の若い頃の姿を発見して驚きを感じている様子も見られました。

本展は、国文研のことを良く知っている人も、全く知らない人も楽しめる内容にまとめられていましたので、国文研のことや古典籍・歴史史料の魅力を感じていただくために、多くの人に見ていただきたいと感じた展覧会でした。皆さんもぜひ、国文研の各種データベースや閲覧室で〈推し〉の一冊を涉猟してみてください。



（出光美術館学芸員 金子 馨）

## 第15回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。令和4(2022)年で第15回を迎えます。受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です(3名以内)。

今回は、令和3(2021)年1月～12月までの著書を対象とし、選考委員会における選考の結果、3名の受賞者が決定いたしました。

授賞式は3年ぶりに対面で開催することができ、10月21日(金)に当館大会議室で執り行われました。

授賞式には、日本古典文学研究に携わる研究者が多数出席し、廣瀬委員長から選考経過報告、上野委員、村尾委員、廣瀬委員長による講評、そして、受賞者に賞状と副賞が授与され、当館の渡部館長からお祝いの言葉が贈られました。また、授賞式終了後の懇談会では出席者が受賞者を祝福し、激励していました。



左から山本氏、館野氏、葛西氏

### ■ 第15回日本古典文学学術賞受賞者

葛西 太一 (筑波大学 人文社会系 准教授)

研究業績：『日本書紀段階編修論—文体・注記・語法からみた多様性と多層性—』花鳥社

館野 文昭 (埼玉大学大学院 人文社会科学研究科 准教授)

研究業績：『中世「歌学知」の史的展開』花鳥社

山本 嘉孝 (国文学研究資料館 研究部 准教授)

研究業績：『詩文と経世—幕府儒臣の十八世紀』名古屋大学出版会

### ■ 第15回日本古典文学学術賞 選考委員

上野 誠 (上代文学会／國學院大学特別専任教授)

河添 房江 (中古文学会／東京学芸大学名誉教授)

荒木 浩 (中世文学会／国際日本文化研究センター教授)

廣瀬 千紗子 (日本近世文学会／同志社女子大学名誉教授) ※委員長

村尾 誠一 (和歌文学会／東京外国語大学名誉教授)

神作 研一 (国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長)

落合 博志 (国文学研究資料館教授)

選考講評、これまでの受賞者などの情報は、当館ウェブサイト日本古典文学学術賞ページを御覧ください。

<https://www.nijl.ac.jp/outline/gakujuytusyou.html>

## ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント 4 件

「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」は、各界で活躍するアーティストと翻訳家を AIR・TIR として招き、研究者とともに古典籍の魅力を探求し、新たな文化・芸術的価値を創出する事業です。今年の活動の一部をご紹介します。 ※各 QR コードからイベントの概要および動画をご覧ください。

### ●ないじえるアートトーク

『枕草子』に書かれた以上に清少納言や中宮定子を知りたいあなたに」



新作で清少納言および彼女をとりまく人々の物語を描いている AIR の片瀨須直氏（アニメーション映画監督）は、ないじえるのワークショップで研究者と交流を重ねてきた過程を踏まえ、創作活動の試行錯誤や、映像の作り手という新しい視点から古典作品を読み解く可能性などを、2回にわたるないじえるアートトークで披露しました。

8月21日に開催した1回目のアートトークでは、片瀨氏は儀礼と装束の研究から考える中宮定子の存在や、中宮における清少納言の地位の変化などの話題について仮説を提示し、東洋大学の山中悠希氏と対談を行いました。

### ●ないじえるアートトーク2

「清少納言たちがそこにいた「空間」を探る」



10月29日に開催したないじえるアートトーク2では、大妻女子大学の赤澤真理氏を対談者に迎え、古典作品に描かれた様々な「空間」と、そこを舞台に紡ぎ出された物語を取り上げて片瀨氏と語り合いました。

### ●ないじえるトランスレーショントーク

鼎談「江戸の境界を生きた人と書物のカー—勝小吉『夢酔独言』から扉をひらく」



TIR の毛丹青氏（翻訳家）は、聖学院大学学長の清水正之氏と当館副館長の入口敦志氏と ZOOM にて鼎談を行いました。鼎談では、毛氏が提起した、「非主流的思想書」として勝小吉の日記『夢酔独言』を位置付けられるのではないかという問題意識をめぐって、研究者のお二人が思想史、書物文化史の視点で迫り、『夢酔独言』が書かれ、読み継がれてきたそのエネルギー源を読み解きました。

### ●公開ワークショップ

「ものがたりを保存する～漆でつくる時間封筒～」



9月17日に、AIR の築谷聡氏（漆芸家）を講師に迎え、体験型ワークショップを開催しました。新日本古典籍総合データベースに掲載された画像を印刷したシートを素材に封筒をデザインし、それを漆でコーティングすることを通して、今の記憶を未来に伝える時間封筒を参加者とともに作りました。

（黄 昱）

## 2022 年度第 1 回こくぶんけんトーク 『無門関』の不思議な成功物語

2022年10月1日（土）14時より、こくぶんけんトークが開催されました。「こくぶんけんトーク」とは、研究の概要、またそれに対する疑問や質問を、当館の研究者のトークを交えながら、参加者の皆様と一緒に考えてゆくイベントです。今年度の第1回目は中世仏教と文学を専門とするダヴァン・ディディエ准教授が講師を、コーディネーターを人文知コミュニケーターの糸が務め、「『無門関』の不思議な成功物語」と題し、中国の宋の時代に成立した禅書『無門関』の日本への伝来と流布についてお話いただきました。



今日の私たちが難解なやりとりを「禅問答のようだ」と形容するように、禅の修行に用いられる書物には、一見しただけでは理解しがたい文章が並んでいます。トークの前半では、禅籍には一人の禅師の言動を記録した「語録」と、語録に登場するエピソードを短くまとめた「公案」があること、また公案の理解を通じて悟りをひらく「看話禅」と、公案に対する見解を文字で表現する「文字禅」といった修行方法があることなど、禅を初めて学ぶひとにもわかりやすく、丁寧な解説がありました。

禅籍の中でも日本において度々刊行され、広く読まれた『無門関』ですが、この書物が生まれた中国では、13世紀の三度の刊行を経て、その後は忘れ去られてしまいます。トークの後半では、『無門関』が、無本覚心という一人の禅僧によって日本にもたらされて以後、五山版や古活字版となり、さらには注釈書として数多く刊行されたことを、会場に展示された古典籍を取り上げながらお話いただきました。参加者からは「中国で廃れてしまった理由はなぜか」「なぜ近世になってから広く読まれたのか」などの質問が寄せられ、講師とコーディネーターを中心に、会場では充実したトークが繰り広げられました。今後も知られざる当館の資料や研究活動の一端を、こくぶんけんトークを通じて、広く発信していきたいと思えます。

（糸 汐里）

## 令和4年度（2022年度）「古典の日」講演会

令和4年11月3日（木・祝）、国文学研究資料館2階大会議室において、当館主催の「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、『源氏物語』の成立にかかわる記録のうち、最も古い日時が寛弘5年（1008年）11月1日であることに由来しています。当館でも古典に親しむという趣旨に賛同し、平成24年度から記念の講演会を催しております。今年度は感染対策を万全に講じた上で、実に三年ぶりの開催となりました。講師に恋田知子氏（慶応義塾大学准教授）と藤原克己氏（武蔵野大学日本文学研究所客員研究員、東京大学名誉教授）をお迎えし、貴重なお話をうかがいました。



恋田氏

藤原氏

渡部泰明館長の挨拶に始まり、まずは恋田氏より、「『猿源氏草子』を読む—鯛売りの物語—」という題でお話がありました。「なぜ“鯛売り”という設定なのか？」という疑問からスタートし、卑俗なものと高尚なものとをあえて混交・往還させる本作品の妙味、またそうしたパロディ的な言語遊戯を享受できる層のリテラシーの問題、信仰の対象としての鯛の文学史など、当館所蔵の古典籍資料も数多くご紹介いただきつつ、存分に語っていただきました。

次いで、藤原氏より、「源氏物語の大きさと細やかさ」という題でご講演いただきました。『源氏物語』は決して単なる絵空事の作り話などではなく、紫式部の生きた時代の社会や現実の厳しさをもふまえた雄大な作品であること、一方でまた、めぐる季節の中に人の生を織り込んでゆく濃密で繊細な筆致は、17世紀末のフランスの小説『クレーヴの奥方』にも通じる最も美しい思想のあらわれであることなどお話をいただきました。古典文学の尽きせぬ魅力の余韻に浸りつつ、今年度も盛況のうちに閉会しました。

（中西 智子）

## 2022年度アーカイブズ・カレッジ短期コース及びシンポジウム開催

2022年11月7日（月）から12日（土）にかけてアーカイブズ・カレッジ短期コースを福島県双葉郡富岡町の文化交流センター「学びの森」及び「とみおかアーカイブ・ミュージアム」で開催しました。富岡町は東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故によって、大きな被害を受け、2017年3月まで町域全体に避難指示が出されていました。そして、現在も広い範囲で帰還困難区域に指定されており、避難生活を余儀なくされている町民も多くいる自治体です。

今回のアーカイブズ・カレッジはクラウドファンディングでの支援で開催することができ、自治体職員や学芸員、資料保全団体、大学院生など29名が参加しました。従来の短期コースのカリキュラムとともに震災・原子力災害被災地域に特徴的な地域のアーカイブズを学ぶことができました。実際に「とみおかアーカイブ・ミュージアム」の視察も行いました。

また、11月13日（日）には国文学研究資料館シンポジウム「福島県富岡町の地域資料・災害資料・アーカイブズ」（共催：富岡町。後援：福島県）を開催しました。第一報告は阿部祥久氏（富岡町役場総務課総務係長）「全町避難と公文書管理」、第二報告は米山知宏氏（杉戸町役場住民協働課主幹）「アーカイブズが”つなぐ”地域と未来」、第三報告は青木陸氏（国文学研究資料館准教授）「災害における公文書の救助と復元—茨城県常総市を事例に—」でして、報告後に西村がコーディネーターとなって討論を行いました（当初は第三報告として門馬健氏「地域資料保全とアーカイブズ形成」を予定していましたが、体調不良のため青木氏に変更しました）。特に、2011年3月11日以降の公文書の保管・活用を議論することができました。

クラウドファンディングご支援の皆さま、富岡町役場の皆さままことにありがとうございました。（西村 慎太郎）



## 総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

## ■ 小野光絵さん、中川 豊さんが学位取得

9月28日(水)、令和4年度秋季学位記授与式が行われ、小野光絵さんと中川 豊さんに博士(文学)の学位が授与されました。おめでとうございます。お二人からの言葉を紹介します。

## ○小野光絵さん(課程博士)

学位取得のご連絡を頂き、深い喜びと感謝の思いに満たされました。中々成果が出せず不甲斐ない私を忍耐強くご指導下さった指導教員の先生方は勿論、長きに渡り私を応援し支えてくれた家族、相談にいつも快く応じて下さった教育支援係の皆様をはじめ、多くの方々のお力添えに恵まれたことに感謝するばかりです。博士号は身に余る光栄であり、私はまだ文学について何も知らないに等しいと思います。今後とも研鑽を続けて参りたいと思います。

## ○中川 豊さん(論文博士) ※中京大学 准教授

主査の神作研一教授をはじめ、先生方のご指導のおかげで学位を取得することができました。ありがとうございました。何十年も前に執筆した論文の一つひとつと向き合い、削除・加筆修正し、さらに各論の整合性を図り配列して論集として体系化する作業がいかに困難かを痛感しました。また、自宅からでも国文研の豊富な画像データベースを有効に活用させていただき、書誌的事項のチェック等を行うことができました。先生方からご指導いただきましたお言葉を参考にして今後の執筆に反映していく所存です。

## ■ 明治古典会に参加して

7月8日(金)、大学院の教育研究プロジェクトの一環として、東京古書会館(東京神田)で開かれた「明治古典会七夕古書大入札会2022」の見学会、「古典会ツアー」が行われ、国文学研究資料館の教員・院生・研究員の計11名が参加しました。「明治古典会」は明治から昭和期の古書等を扱う日本唯一の入札会で、60年以上の歴史があります。今回は、夏目漱石や永井荷風など有名作家の原稿・書簡・初版本等のほか、美術・工芸書、古典籍、錦絵・版画、古地図、古文書等、約750点が一堂に会しました。

日本文学研究専攻の院生は日頃から原典資料を活用した研究を行うことが多く、自身の研究テーマと関係のある資料には特に熱心に<sup>ていこまよう</sup>見入っていました。また、私は書道が専門領域であり、定家様と称される藤原定家の特徴的な文字造形などを研究対象としているため、普段は写本に着目することが多いのですが、今回は写本に限らず他の院生の研究に関わる版本も共に見ることで、自分の専門とは異なる知識を得ることもできました。特に今回の見学会では、各分野の先生方と一緒にできたことで、様々な現物資料を前にして御教示頂けたことは、とても貴重な

機会であったと思います。大学院から外に出て、実際に売買されている資料を目の前のしでの臨場感あふれるお話は、大変興味深いものでした。加えて、今後の研究活動のなかで必要となる資料としての価値を見抜く力を養える場であったと思います。今回の古典会ツアーがきっかけとなり、今後の調査・研究に資する資料を見出すことができました。それらは年度末には一覧する機会が設けられる予定であり、とても楽しみにしております。

日頃の授業や研究指導でも実際に資料を見る機会は豊富にありますが、今回の古典会に参加して資料の収蔵に至る過程やそこでの研究者の着眼点・役割にも興味を持ちました。今後も古典会の見学が予定されておりますので、是非参加し、そこから得た経験を今後の研究に活かしていきたいと思っております。

(日本文学研究専攻2年 福原 真子)



日本文学研究専攻の教員の引率で院生と国文学研究資料館の研究員が参加。

## ■ 2022年度入試説明会 オンラインで開催

9月23日(金・祝)、日本文学研究専攻では入試説明会をオンラインで開催しました。オンラインでの開催は今年が3回目となり、都内のみならず、東北、関西、四国からも他大学の修士課程に在籍する学生や、在職しながら博士課程への進学を検討中の社会人の参加があり、当館を基盤機関とする当専攻ならではの研究環境、旅費や資料複写などの経済的な支援について説明を受けました。

続く研究紹介では、藤實久美子教授、多田蔵人准教授、中西智子准教授が自身の研究の一端を紹介し、参加者は多岐にわたる研究分野を専門とする教授陣が揃う環境に興味を示しながら、膨大な原典資料や各種データベースを活用した研究の進め方に熱心に耳を傾けていました。

参加者の皆様には、教員との個別相談や在学生との懇談会も含めた今回の説明会で、研究環境や学生生活など進学後のイメージをより明確なものにさせていただいたことと思います。対面での開催は叶いませんでしたが、遠方の方にも多くご参加いただいたのはオンライン開催のメリットだったと考えています。是非、実際に国文学研究資料館へ足を運んで研究環境を肌で感じていただければと思います。

(齋藤 真麻理)



令和4年6月より総研大担当教員となった中西智子准教授による研究紹介。

## 電子展示室「書物で見る 日本古典文学史」公開のお知らせ

何時でも何処からでも楽しんでいただける【電子展示室】に仲間が増えました。通常展「和書のさまざま」に続き「書物で見る 日本古典文学史」のWeb版を公開しました。この通常展は、上代から明治初期までの文学を書物（古典籍）によってたどる企画です。皆さんが教科書でなじみの深い作品を中心に、文学史の流れを示しています。Web版では、時代を行き来してどんな書物が創られてきたのかをサーベイしたり、気になる書物を（新日本古典籍総合DBへリンクして）館蔵資料のデジタル画像で全頁くまなく閲覧したりできます。

今年度も10月から秋の通常展を開催しています。今も事前予約制・時間制限付きでご不便をおかけしています。展示は1月25日で終わりますが、その後も電子展示室は24時間オープンしています。見逃した方も、もっとゆっくり堪能したかった方も、是非こちらを覗いてみてください。（北村 啓子）

▶ここから

<https://www.nijl.ac.jp/koten/webtenji/bungakushi.html>



## 表紙絵資料紹介

### 袖珍銅版草双紙コレクション 明治十六～二〇年頃刊 袖珍本各冊【ラ6-90-1～76】

尾形月耕、梅堂国政他画 東京 金松堂辻岡文助、錦耕堂荒川藤兵衛他版

8区画に仕切られた桐箱に収まる、多数の袖珍本からなる銅版草双紙のコレクション。蓋には「絵本書類入／工藤貫一郎敬白」とある。70冊余におよぶ草双紙は、明治16年から20年頃に東京で刊行されたもの。所蔵者の工藤貫一郎は、院内銀山（現 秋田県湯沢市）に住む少年で、コレクションの一冊『大江山酒呑童子』には「明治廿年七月十一日求之工藤貫一郎 十歳六ヶ月」と記されている。銀山の繁栄のなかで、工藤家が少年に買い与えたものだろう。箱に朱書で「上上十八冊」「上六冊」などと区画ごとに記し、ランク付けして収蔵したようだ。多くの書冊が柿渋塗りの保護紙に包まれ、多色摺木版印刷の華やかな書袋も裏打され、帙として再利用されるなど、愛玩・蒐集の対象として、大事にした様子が窺える。銅版草双紙は、本文が墨一色による印刷で、粗悪な和紙か洋紙を用いる。幕末明治初期の切附本などを素材とし、戦記物、実録物、銘々伝、敵討一代記など、一冊読み切りの安価なものが主流であった。梅堂国政や尾形月耕など、著名な画工の名も確認できるが、実際は未熟な銅版彫師たちが本文・挿絵ともに切り貼り細工のように作製した。「銅版はどんな紙でも刷れました、和紙、薄葉、布でも」（浅野文三郎『明治初年より二十年間 図書と雑誌』）とあるように、銅版には粗悪な紙にも印刷できる利点があり、消耗品として露店や縁日、団扇屋、駄菓子屋等で売られていた。規制の対象外で、奥付の記載や値段表記はあてにならない。観音開きの仕掛け絵に特徴があり、その補強と束感（厚味）を出すため、袋綴じ本文の間に漉き返しの粗悪な紙が挟まれている。精緻な銅版の挿絵とともに、少年たちの嗜好を窺い知る好材料である。（山本 和明）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
**国文学研究資料館**  
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3  
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.62

発行日 令和5(2023)年1月18日

編集 国文学研究資料館 資源活用連携部

製作 株式会社トリッド

©人間文化研究機構国文学研究資料館